



丹波市青垣町山垣区での地域連携事業の展開 : 区有文書の活用を中心に (<活動報告>)

出水, 清之助

(Citation)

Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 16:92-96

(Issue Date)

2024-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100499195>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100499195>



る（いずれも神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター発行）。また、研究会の活動紹介については室山京子「神戸大学近世地域史研究会について」『LINK』一〇、神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター、二〇一八年）、同『『観聞記』の世界』（神戸大学近世地域史研究会活動報告書）の紹介」（『播磨学紀要』二三、播磨学研究所、二〇一九年）、同「地域歴史資料を学び楽しむ「場づくり」（『ヒストリア』二八二、二〇二〇年一〇月）などがある。なお、研究会運営

は設立から二〇一五年まで神戸大学大学院人文科学研究科非常勤講師（当時）河野未央氏が担当し、二〇一六年筆者が引き継いだ。

（2）『龍野市史』第二巻、一〇〇頁。

（3）善龍寺文書としては、『龍野市史』第一巻七三九〜七四一頁で嘉永元年「龍野領町在寺院開基本寺并道場本書」を整理した「表四七 龍野藩領内の真宗寺院」、『同』第五巻（史料編）一八六〜七頁には龍野藩京極氏時代の城下寺院の記録に関する史料を掲載している。

丹波市青垣町山垣区での地域連携事業の展開

——区有文書の活用を中心に——

一 はじめに

丹波市と神戸大学大学院人文科学研究科は、平成一九年（二〇〇七）に、地域歴史遺産の活用や、活用に携わる人材の育成を目指す

して、「丹波市と神戸大学大学院人文科学研究科との地域活性化の連携協力に関する協定」を締結した。以降、丹波市と神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センターは、地域住民と連携しながら、市域に残された古文書を中心とする歴史資料の調査・研究、

出水 清之助

保全・活用に、一五年以上にわたって取り組んできた。

筆者自身は、大学院に進学した平成二七年（二〇一五）以降、同事業の調査等に関わりはじめ、令和三年（二〇二二）以降は、教員の立場として地域連携センターのスタッフの一員となり、井上舞氏（人文科学研究科特命講師）とともに同事業の主担当をつとめている。

今回はそうした丹波市との地域連携事業の中から、この間自身が関わった、青垣町山垣区での活動について紹介したい。

二 山垣区について

紹介に入る前に、山垣区の地理的・歴史的な基本情報を紹介しておきたい。現代の山垣区につながる近世の山垣村は、丹波国氷上郡（現丹波市）の最北部に位置しており、北は但馬街道を経て但馬国朝来郡（現朝来市）に、東は梨の木峠を越えて丹波国天田郡（現京都府福知山市）に通じるなど、国境・郡境に近接する交通の要衝であった。山垣村は、但馬丹波の境をなす遠坂峠を

越えるための主要地である遠坂谷という谷筋にある。村の中央には加古川支流の遠坂川が流れ、四方は山々に囲まれるなど、自然環境の利用と密接不可分な地域でもあった。この遠坂谷に所在する村々の領主関係は錯綜しており、山垣村も元禄八（一六九五）年以降は、同村の集落のうち上地・下地・向は柏原藩領、平地は旗本永見氏知行の相給村落となった。

こうした江戸時代以来の歴史をもつ山垣村は、明治二年（一八八九）の市制町村制施行にともなう「明治の大合併」により、隣接する遠坂村・中佐治村と合併して、新たに「遠坂村」となった。合併後も、「山垣」という地域が消滅した訳ではなく、江戸時代以来の山垣村は、「遠坂村」を構成する大字として、その後も存在し続けた。

大正・昭和になるにつれて「山垣村」ではなく「山垣区」と呼ばれることが多くなるが、昭和三〇年（一九五五）に青垣町が成立（遠坂村・佐治町・芦田村・神楽村が合併）した後も、平成一六年（二〇〇四）に丹波市が成立（氷上町、柏原町、青垣町、春日町、山南町、市島町が合併）した後も、

江戸時代の山垣村に源流を持つ「山垣区」は、人々の生活、住民自治の単位として生き続け、現在に至っている。

三 山垣区との出会い

——山垣足立家文書の調査——

次に、地域連携センターが山垣区へ調査に入るようになった経緯について触れておきたい。直接の契機は、平成三〇年（二〇一八）一月二〇日に開催された歴史講座・古文書相談会において、青垣町山垣区の住民から、自宅で保管している古文書の調査をしてほしいとの依頼があったことに遡る。

この相談については、当時丹波市との連携事業を担当していた前田結城氏（当時は人文学研究科科学術研究員）が対応された。依頼主である所蔵者の家（足立家）は、近世の山垣村庄屋の流れをくむ家であり、近代以降も遠坂村の村会議員や収入役を勤めるなど村の公職を歴任した家でもある。近世・近現代にかけての地域社会運営に関する重要な史料が多く含まれていることが想定されたため、年度末の三月二日に前田氏

の主導のもと、急遽調査に着手することとなった。

私自身は当時大学院生であったため、前田氏の誘いをうける形で、調査に同行することとなった。初めて訪れる地域であったが、所蔵者の話を聞きながら整理作業をすることを通じて、徐々に山垣という地域への理解が深まった。所蔵者が見ている中の作業は緊張感を伴うものでもあったが、その後も継続してこの地域に関わることになった現在から振り返れば、誠に得難い経験であった。

また、この調査には、平岩泰典氏（丹波市文化財保護審議委員）や、同地区の住民の方々も参加された。このような地域の人々を巻き込んだ調査が進む過程で、次に述べる区有文書が存在が浮上し、新たな調査を実施することとなった。

四 山垣区有文書の調査と

「吉野屋日記」の発見

令和元年（二〇一九）七月、足立家所蔵の史料とも大きく関わる区有文書の調査が

実施された。調査の結果、山垣区有文書には、近世の川や山の利用に関する争論関係の文書や、近代以降の区の運営に関わる資料などが豊富に残されていることが判明した。山垣区の歴史を知るための基本資料となり得る文書群の調査であったが、この時も大学関係者だけではなく、山垣区長をはじめとする地域住民や、平岩氏ら地域の歴史に詳しい人々の協力を得ることができた。短期集中型の調査であったが、地域住民に



写真1 山垣区での調査風景

区有文書の存在を知ってもらえるよい機会になったと思われる。

また、この調査の過程で、長年所在が不明であった「吉野屋日記」（山垣区所蔵）の所在が判明し、再調査を行うことができたのは、特筆すべき点である。「吉野屋日記」とは、山垣村平地の庄屋であった足立文右衛門（屋号「吉野屋」）が記した山論の経緯を記した日誌である。山垣村の周辺地域は、先述したような自然環境と錯綜



写真2 吉野屋日記（丹波市指定文化財）

した支配関係に置かれており、それに規定される形で、享保期以降、明治初年に至るまで、断続的に山論が発生した。同日記は、山論が再発した安政三年（一八五六）五月から文久二年（一八六二）二月まで、約五年七ヶ月にわたって断続的に書き続けられ、現在も一・五・六・八・一〇・一一・一二巻の計七冊が山垣区に残されている。

内容としては、訴訟の手続きや裁判の様子、訴訟費用のやりくりを含めた当事者の苦勞、山垣村における生活のあり方などが克明に記されており、非常に貴重な史料であるといえる。同日記は、山垣区で代々引き継がれ、昭和五九年（一九八四）には旧青垣町、合併後の現在は、丹波市の指定文化財となっている。このように、地域の歴史を知るうえで極めて重要な史料を再調査することができたのは、この一連の調査の中でも大きな成果といえるだろう。

五 地域展示の実施と

「たんば地域史料叢書」の刊行

こうした山垣区での調査成果は、責任者

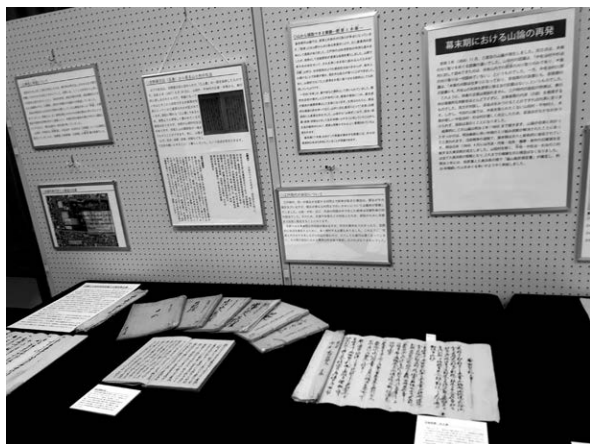


写真3 地域展示の一部

であった前田氏の急逝や、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う調査中断の影響もあり、なかなか地元に戻元することができなかったが、二〇二三年度になってようやく成果報告の場に恵まれた。

第一に、八月二日から九月三日にかけて、「山垣区有文書」や「吉野屋日記」を用いて、「区有文書からみる江戸時代の山垣村」と題した地域展示を同地区の「やまびこセンター」で実施した。展示では「1.

山垣村と区有文書」、「2. 江戸時代の山垣村」、「3. 資源をめぐる争いと村の生活」の三つのセクションを設け、それぞれ、山垣村や区有文書の概要、領主の変遷や年貢負担のあり方、水論・山論の経緯等、区有文書の分析を通じて明らかにした調査成果を地域住民に紹介した。

それ以外に、展示会に附随する企画として、ギャラリートークも兼ねて、同地区の夏祭りである愛宕祭（足立遠政公慰霊祭、八月二三日）で「山垣区有文書と江戸時代の山垣村」と題した講演を実施したほか、全頁カラー印刷の図録も作成し、山垣区に配布した。

小さな地域展示ではあったが、山垣地区のみならず、周辺の地区の住民も訪れ、「自分たちの地区でもこのような展示をしてみたい」、「地域に古文書が残されていないか調べてみようと思う」など、様々な感想をもらうことができた。

第二に、『たんば地域史料叢書1 江戸時代の村と山―丹波国氷上郡山垣村山論関係史料―』を刊行した。『たんば地域史料叢書』シリーズは、丹波地域の歴史を知る



写真4 『たんば地域史料叢書』の表紙

ことのできる重要で、かつ解説が困難な史料を活字化し、冊子としてまとめることで、様々な人に利用してもらうことを期待して、二〇二三年度に新たに創刊した。

その第1巻として、山垣区に所在する山論関係の史料を可能な限り翻刻し収載した。内容は「解説編」と「史料編」の二部構成となっており、前者は筆者の「史料解題」と平岩泰典氏の「解説」、後者は「吉野屋日記」全七冊や山垣区有文書所収の山論絵図・済状等の翻刻文から構成されている。本書は、地元の郷土史団体である「遠阪村探究会」を中心に、山垣区周辺の人々に配布した。

六 おわりに

以上、ここ五年間ほどの青垣町山垣区での地域連携事業の展開についてまとめてみた。私自身、地域連携センターの正式なスタッフとして関わった最初の仕事であり、明確なプランも持たず、様々な試行錯誤を繰り返しながら展開したもので、至らない点も多かったように思う（先輩の井上氏には相当助けていただいた）。

それでも一応私なりに意識していた課題としては、いかに地域の人々にとって史料を身近な存在にできるか、ということであった。

こうした課題意識を抱いたのは、いくつかの取り組みの中で、地域で大切に残されてきた史料が、地域の人々からその存在を忘れられ、「自分たちと関係のないもの」になりつつある、と感じたからである。例えば、地域で保管されている区有文書でも、区長以外その存在をよく知らないということとは多々ある。また、たとえ文書の内容を知っている、多くの史料がくずし字で書

かれていたため、何が残されているのかわからない、という事例にも接した。

今回の地域展示や『たんば地域史料叢書』の刊行は、そうした課題意識のもと展開した、私なりのささやかな試みである。まず区有文書の内容を知ってもらい、どのような史料が、いかなる人々の営為のもとで残されてきたのか。それらを伝えることで、地域住民と史料の関係を少しでも取り結び、「自分たちにとって大切なもの」と思ってもらえるように、今後も活動を継続していきたい。

参考文献

- 出水清之助「山垣・足立家文書の解説」（『山垣・足立家文書調査報告書——解説と目録——』二〇二三年、神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センター・丹波市教育委員会編集・発行、以下同様）
- 出水清之助『《史料解題》丹波国氷上郡山垣村山論関係史料について——その史料価値と若干の内容紹介——』（『たんば地域史料叢書Ⅰ 江戸時代の村と山——丹波国氷上郡山垣村山論関係史料——』二〇二四年）

『（展示図録）令和五年度連携事業成果報告展——区有文書からみる江戸時代の山垣村——』（二〇二三年）